

『空華集』 訳注

―七言絶句部 (一)―

(国語教育講座) 太田 亨

(令和元年九月二日受理)

『空華集』は義堂周信(一三二五―一三八八)が残した作品集である。本稿では、その七言絶句部に所収される作品1―5番目の訳注を試みる。

五山版『空華集』を底本に用い、元禄九年版『空華集』を校勘に用いる。押韻については、平水韻に従う。

1 題友竹堂行卷

友竹堂の行卷に題す

擘開玉峽千尋水

擘開す 玉峽千尋の水

收得驪龍一顆珠

收得す 驪龍一顆の珠

袖裏携歸東海上

袖裏 携へ帰る 東海の上り

靈光映奪萬珊瑚①

靈光 映奪す 万珊瑚

*韻字は、上平声七虞「珠・瑚」。起句と承句が対句になっていることによる踏み落としか。

①「映」字、元禄版作「映」字。

題意

竹堂□友が書いた詩文について詠じる。義堂が「寄善福友竹堂」詩を詠んでいることから、竹堂□友は相模善福寺に住した経歴を持つ。「行卷」は、

科挙に応じる者が試験前に身分の高い人に見せる詩文をいうが、ここでは文筆の師や有力な庇護者に見せるために書いた詩文のこと。「行卷」語は義堂「書東書記行卷」(序部)にも見える。中巖圓月にも「題竹堂行卷」(『東海一漚集』所収)詩があり、竹堂の詩について、「掩卷爲三歡、孰敢弗歆服」(巻を掩ひて三歡を爲す、孰か敢て歆服せざらん)という。竹堂が作詩に長じていたことが察せられる。

現代語訳

清らかな山あいに奥深く流れる谷川は、山の神が引き裂いたものであり、そこに棲む黒龍のあごの下にある千金の珠にも比される詩文を得ることができた。これからこの優れた詩文を袖の中に携えて関東へ帰るのである。その作品は、仏性が靈妙な光明を放ち、万本の珊瑚たる智慧の輝きを奪っている。

語釈

【擘開玉峽】「擘開」は、引き裂く。「玉峽」は、清く美しい谷間、山間。蘇軾「廬山二勝并序」の一首「開元漱玉亭」に「擘開青玉峽、飛出兩白龍」(青玉峽を擘開して、兩白龍を飛出す)とある。『四河入海』に、「一云、擘一、言ハ廬山ノ山神力青山ヲヒキワケテ瀑布ヲ落タソ。白竜ハ瀑ヲ云ソ。青玉ハ

山ノ色ゾ」とあり、廬山の山神が青い山を引き裂いて瀑布（滝）を作ったと解する。この一韓智翹の抄文は『施注蘇詩』の注に「述征記云、華山首陽、本同一山。巨靈擘開、以通河流」（述征記に云ふ、華山と首陽とは、本同一の山なり。巨靈擘開し、以て河流を通ず）とあるのに依拠している。『述征記』は郭縁生著。

【千尋水】「千尋」は、山が非常に高いこと、谷・海が非常に深いこと。義堂「遊龍門寺觀瀑布題觀音堂壁有叙」詩においても、「擘開翠壁千尋嶮、迸出銀河一派長」（翠壁千尋の嶮を擘開して、銀河一派の長を迸出す）という。孫魴「甘露寺」（『三体詩』所収）詩には「地拱千尋嶮、天垂四面青」（地は千尋の嶮を拱し、天は四面の青を垂る）とあり、『三体詩素隱抄』に「千尋トハ、注ニ、四尺ヲ仞ト為ス。仞ニ倍スルヲ尋ト為スト云ヘリ。コレヨリ見レバ、一尋ハ八尺ゾ。サテ、千尋ハ八千尺ゾ。四面ハ四方ノ意ゾ。詩ノ意ハ、コノ寺ノ地形ハ、八千尺バカリナル嶮岨ナル山峯ガ四方ヲ環衛トメグリテ、青天ノ色ガ四方ニ垂レタルヤウニ低ク見ユルトゾ」とある。

【收得】とらえる。

【驪龍一顆珠】「驪龍」は黒龍をいう。「一顆」は一個。顆は丸いものを数えるときに用いる語。「驪龍一顆珠」は、『莊子』雜篇「列御寇」に「千金之珠、必在九重之淵、而驪龍領下」（千金の珠は、必ず九重の淵の、而も驪龍の領下に在り）とあるのを踏まえ、千金もの宝珠（非常に貴重なもの）は、奥深い淵の黒龍のあごの下（めつたに逢うことの出来ない場所）にあることをいう。命がけで求めなければ得られないことの譬えに用いられる。高価な美玉の意にもいう。清原宣賢抄『莊子抄』（国立公文書館蔵）には「九重ハ九エノフカキ処ト云心也。驪龍ハクロイ龍也。龍ハ子コイモノナリ」とある。

【袖裏】そでの中。義堂「次韻爲聰上人題谿山好處詩卷」詩に、「胸中定有谿山好、袖裏可無珠玉携」（胸中に定めて谿山の好きこと有らん、袖裏に珠玉の

携ふることに無かるべけんや）という。

【東海上】ここでは関東を指す。

【靈光】靈妙不可思議なる光明を放つものの意で、衆生本具の仏性（仏となることのできる性質）を指して言う。『碧巖録』一五則の頌評唱に、平田普岸の頌を挙げ、「平田和尚、有一頌最好。靈光不昧、万古微猷」（平田和尚、一頌有りて最も好し。靈光不昧、万古の微猷）とあり、心の光明が明るく、万古にわたるすばらしい道である、と称揚する。『万安抄』には、「此自己ノ靈光ハ万古ノ微猷也。微ハ玄也。美也。猷ハ道也。法也。玄玄微妙ノ法也。又此一道ノ神光ハ無始以來、永劫マテ不昧。人々具足、具足圓成スル也。若知解ヲ存セハ、靈光ヲ味ウスホトニ、此門ニハ入ラレマイ」とある。また、六二則にも「古人道、靈光獨耀、迴脫根塵。體露眞常、不拘文字」（古人道ふ、靈光獨り耀きて、迴に根塵を脱す。體露眞常、文字に拘はらず）とある。義堂は「餞粟田口武衛相公歸省詩序」（序部）の詩でも、「歸來落筆賦靈光」（帰り来りて筆を落し靈光を賦せよ）という。

【映奪】光輝を奪う。「映」は映の俗字。『碧巖録』七十則の頌に「十洲春盡花凋殘、珊瑚樹林日杲杲」（十洲春盡きて花凋殘し、珊瑚の樹林日杲杲）とあり、その評唱に「春盡之際、百千萬株花、一時凋殘。獨有珊瑚樹林、不解凋落。與太陽相奪、其光交映」（春盡くるの際、百千万株の花、一時に凋殘す。獨り珊瑚樹林のみ有り、凋落を解せず。太陽と相奪ひて、其の光交映す）とある。その万安抄には、「春力尽レハ、百千万株ノ花カ一時ニ凋殘スル也。珊瑚樹ハカリ太陽ト互ニ光ヲ相奪テ交映スル也」とある。

【珊瑚】「珊瑚」は、人間が本来具有する智慧のことをいう。禅月貫休「還奉人歌行卷」（『禅月集』卷二）詩に、「珊瑚枝枝撐著月」（珊瑚の枝が月光を受け止めて光り輝いているという。この禅月の「珊瑚枝枝撐著月」句は、『碧巖録』十三則評

唱や百則本則に引用されている。百則本則の『万安抄』に「人々妄想尽レハ真知露出ス。是則珊瑚―スル処也」とあり、本来具有する真知が表れると解している。

余滴 竹堂□友の行巻については、巻物ではなかったかと想像する。義堂はそれを読んで評するに際し、前半部では、行巻が成立した背景を一顆の珠が獲得された背景に比して叙述している。後半部では、郷寺に還帰する竹堂が携帯する行巻が、人間の本来具有する仏性・悟境から発せられたものであることを称揚する。義堂の用いる詩語の多くに典拠が存在することが確認される。

2 懐菊芳庭

一別芳庭見未由 菊芳庭を懐ふ
一たび芳庭と別れしより 見ゆること未だ由あらず

空江風雨夜颯颯 空江の風雨 夜颯颯

芙蓉寂寞兼冷 芙蓉 寂寞として兼 葭冷やかなり

不審黄華尚健不 不審す 黄華 尚ほ健なりや不やと

*韻字は、下平声十一尤「由・颯・不」

題意 芳庭法菊のことを懐かしく思慕して詠んだ詩。芳庭法菊は近江の人。

法を太平妙準に嗣ぐ。夢窓疎石―太平妙準―芳庭。『日工集』応安元年（一三六八）十二月十日の条に「芳庭は余と二十年の素有り。嘗て同じく洛の西山（天竜寺）に栖霞、相ひ従ふこと久し」とあり、時に義堂が四十四歳であることから考えると、芳庭とは二十代前半より親交があったようである。その後、義堂が三十三歳の時（『日工集』延文二年の条）、関東にいる芳庭に偈を送っていることから、義堂よりも先に京を離れ関東に移ったものと思われる。

義堂「寄題葆光寺依緑詩有叙」の序によれば、芳庭は一時近江に在り、金剛寺に住していたようであり、『日工集』応安三年（一三七〇）六月二十四日の条で、京に赴く前に佐々木崇永を近江の慈恩律寺に火葬していることから、佐々木六角氏と深い繋がりがあったものと思われる。応安元年（一三六八）四月三日に浄妙寺（五山）に住持して以後、義堂と屢々交流し、仏光派と大覚派の確執問題や禅林の衰退ぶりについて談論している。義堂が最も信頼した人物の一人が芳庭であり、「又和答少室兼簡芳庭三首其二」詩で「黄金閣上白眉の僧」と称揚していることから、非常に高く評価していたことが窺える。応安四年（一三七二）三月一日、浄智寺正源庵にて示寂。生前の願いにより武蔵の永興寺に火葬された。四日には、義堂が哀詞を作り祭っている。

現代語訳 一たび芳庭と別れてからこのかた、いまだに会うためのよい手立てが見つからない。人気の無い川に降る雨は風をとめない、夜になるとびゅうびゅうとしきりである。眼前の蓮の花はひっそりと寂しく（まるで自分のようであり）、ひめよしも冷え冷えとした佇まいである（のを見ると、あなたが遠く彼方にいることが思われる）。それについても黄色の菊花たる芳庭は健在なのかどうか心配でならない。

語釈

【空江】むなしく流れる河。人の気配のない寂しい川。賈島「早秋寄題天竺靈隱寺」（『三体詩』所収）詩に、「山鐘夜度空江水、汀月寒生古石樓」（山鐘夜度る空江の水、汀月寒きに生ず古石樓）とある。その他に断江覚恩「雪中菘花」（『貞和類聚祖苑聯芳集』卷九）詩に「誰見空江霽雪中」（誰か見ん空江霽雪の中）、呉節卿「題秋江集」（『聯珠詩格』卷七）詩に「等閑洒向空江上」（等閑に洒ひ向かふ空江の上）、石屏「晚眺」（『聯珠詩格』卷十七）詩に「日落空江生白雲」（日は空江に落ちて白雲を生ず）とある。

【颯颯】雨が降りしきる音。杜甫「秋雨歎其三」詩に「雨聲颯颯催早寒、胡

雁翅濕高飛難」(雨声 颼颼として早寒を催し、胡雁 翅湿ひて高く飛ぶこと難し)とあり、雨が音を立てて降りしきり一足早い寒さを催すという。「颼颼」は風の吹く音の意で用いられることも多い。ここでも「風雨」の形容として解され、風をともなった雨に対して用いている。義堂「題魚蟹二畫」詩にも「風雨忽颼颼」(風雨 忽ち颼颼たり)とある。

【芙蓉寂寞】「芙蓉」は、蓮の花。「荷華」と同意。『毛詩』鄭風「山有扶蘇」に、「山有扶蘇、隰有荷華。不見子都、乃見狂且」(山に扶蘇有り、隰に荷華有り。子都を見ずして、乃ち狂を見る)とある。鄭箋によれば、山に小木(扶蘇)、沢に蓮の花があることは、鄭の昭公が上位に不正な人、下位に美德の持ち主を置いたことを喩えているという。そのため美君子(子都)はおらず、狂愚の人ばかりがいるとする。「荷華」(蓮の花)を美德の持ち主と解するのは、清原宣賢抄『毛詩抄』も同様である。「寂寞」は、ひっそりとして寂しい。ここでは芙蓉がひっそりと寂しくしていることを詠出することで、暗に義堂自身を指している。

【蒹葭】よしとあし。ひめよし。『毛詩』秦風「蒹葭」に、「蒹葭蒼蒼、白露為霜。所謂伊人、在水一方」(蒹葭 蒼蒼たり、白露 霜と為る。所謂伊の人、水の一方に在り)とあり、ひめよしが茂り、白い露が霜になる頃、自分の思う人は水の彼方にいるとする。鄭箋によれば、「伊の人」を賢人と解し、清原宣賢抄『毛詩抄』も同様の解釈を取る。ここでは、蒹葭を詠出することで、暗に義堂が彼方にいる賢人・芳庭を思っていることを示している。

【黃華】黄色の花。菊の花をいう。文天祥「重陽」(『錦繡段』所収)詩に「黃華何故無顔色、應爲元嘉以後詩」(黃華 何故か顔色無からん、応に元嘉以後の詩が為なるべし)とあり、その抄に「サテ東籬ニアル、黃花ノウツクシフモノイハ、何トシタ事ソト云ヘハ、淵明力後ニハ、好キ詩ヲ作りテ、菊ヲ賞スルモノナイ程ニ、サテ無顔色ソ」とある。黃華を菊と解することが一般的

なようである。ここでは、暗に黃華(菊)を詠出することで、芳庭法菊の身を案じている。義堂は、「次韻菊芳庭、贈小師操持者歸江州省親、兼謁太守、遂赴京師、見天龍春屋・等持默庵(四首其二)」詩にも、「節去黃華尚耐霜、憑誰采薦公堂」(節去りて黃華 尚ほ霜に耐へたり、誰に憑りてか采薦として公堂に薦めん)と詠み、芳庭と黃華を併出している。

【尚健不】健在であるのか、そうではないのか。「尚健否」と同じ。『東坡志林』卷十一において、蘇軾は、祥符寺の可久・垂雲・清順の三人と詩をやりとりする仲であった。三人は清貧であったが何一つ憂えるところがなかった。その三人を思つて「老矣、不知尚健否」(老いぬ、尚ほ健なりや否やを知らず)と述べている。「不」の同様の表現として、義堂「送一侍者之駿州、兼簡龍泉東江」詩でも、「殷勤問訊山陰雪、兩樹梅花尚在不」(殷勤して山陰の雪に問訊す、兩樹の梅花 尚ほ在りや不やと)という。

余瀆 義堂は、前半部でこれまでの無音について言い訳し、詩を認めている当夜の状況を描写している。後半部では、芙蓉・蒹葭の有様に自己・義堂の寂寥たる思いを比し、黃華(菊花)に芳庭を比してその安否を案じている。後半部の詩法は、本朝の和歌で言う寄物陳思、あるいは掛詞に類似した用法であり、禅林の公式文書の文体で必須の「機縁の語」の応用と考えられる。

3 悼壁山和侍者出隊而亡 壁山和侍者が隊を出でて亡ざるを悼む

飜著香林舊楮衣 香林の旧楮衣を翻著し

忍持七佛古威儀 七仏の古威儀を忍持す

縱然白壁埋成土 縱然ひ白壁埋もれて土と成るも

願力如山寸不移 願力 山のごとくして寸も移らず

*韻字は、上平声五微「衣」上平声四支「儀・移」

題意 璧山太和侍者が、勸募のため遠く有縁の地に出向いて亡くなったのを悼んで詠んだ詩。義堂は「次韻謝建長太和侍者見訪」詩にも、璧山と金剛幢下の事について話をしたことを詠んでいる。また此山妙在『若木集』の道号頌に「璧山」があり、鐵舟德濟「和侍者雕印」(『閻浮集』)詩に、「璧山篆出太虚空、點劃分明字字紅」(璧山太虚空に篆出し、點劃分明にして字字紅なり)とある。「出隊」は、住持がしばらく大衆を離れて、遠く有縁の地に出向いて勸募することをいう。『禪林象器箋』一四に「出隊者、住持出大衆之隊、在外勸化財糧也」(出隊は、住持大衆の隊より出でて、外に在りて勸化財糧するなり)とある。

現代語訳 璧山は、香林澄遠が師の説法をひそかに記した旧い紙の衣を裏返しに着て(新たな教えを書き加えようとし)、過去七仏が行った行住坐臥の振る舞いを忍耐強く行い続けてきた。たとえ白い宝玉たるあなたが埋もれて土になろうとも、その衆生を濟度しようとした願力は、山のように宏大であり、少しも変わることはない。

語釈 【翻著】裏返して着る。『枯崖和尚漫録』上に、丞相の蔣公芾が示した偈があり、「翻著欄衫倒著靴、横拈豎放総由他」(欄衫を翻著して靴を倒著し、横拈豎放総べて他に由る)という。禪林では、衣や足袋(屨)を裏返しに着用することで、世俗の常識に背いて自らの真実を立てる意がある。ただし、ここでは香林が既に雲門の教えを紙の衣に書いていたので、それを裏返しに着て出隊し、新たな教えを書き加えようとしていたと解する。義堂は「次韻送權侍者歸泉南拜本師塔、兼簡天雄古劍師二首其二」詩においても、「紙衣翻著出關東、千里歸尋七十翁」(紙衣翻著して關東を出で、千里歸りて七十翁を尋ぬ)と詠んでいる。權侍者が泉南に帰って本師の塔を拝するに当たり、關東で受

けた教えが記された紙衣を裏返しに着て、新たに古劍妙快の教えを書き記すことを薦めている。

【香林】香林澄遠(九〇八〇九八七)のこと。雲門文偃の法嗣。雲門は弟子がその説法を記すのを許さなかった。しかし、香林澄遠や明教師寛が紙で衣を作り、雲門が語ったことをすぐにそれに記したので、雲門の言葉が語り継がれるようになった。香林は「紙衣侍者」と呼ばれる。

【楮衣】紙の衣。「楮」は紙。

【忍持】耐えて維持する。『重新點校附音増註蒙求』の「鄭衆不拜」項の注に『後漢書』鄭衆伝を引用し、そこに鄭衆が匈奴に使者として送られるも、単于に拝礼することが出来ないため、「臣誠不忍持大漢節、對氊裘謁拜」(臣誠に大漢の節を持ち、氊裘に対して謁拜するに忍びず)と述べたとある。

【七佛】過去七仏。釈尊以前の六仏に釈尊を加えて七仏という。その法は久遠の昔から嫡嫡正伝された永久不滅の仏法とされる。雪峰慧空「送化士」(『雪峯空和尚外集』)では、「飯在千門萬戸、僧離古寺名山。七佛已前儀式、一時頓覺追還」(飯は千門萬戸に在り、僧は古寺名山を離る。七佛已前の儀式、一時に頓に追還することを覚ゆ)と言い、衆を教化する士に対して、七仏以前からの儀を重視すべきことを述べている。

【古威儀】「威儀」は、威嚴のある容儀。人に崇敬の念を起こさせる容儀のこと。行住坐臥における僧として正しいふりまをいう。禪門では、どんな凡僧でも坐作進退が仏祖の清規にかなっていれば、ただちにそれが仏の威儀であるとする。威儀即佛法。『雪峯空和尚外集』に「四威儀」と題する偈がある。それに対して義堂は「四威儀、華嚴經三十二云、一切諸佛行——、普与衆生而作佛事。有威可畏、謂之威、有儀可象、謂之儀。○菩薩戒經説八種苦。其三——苦也。行住坐臥謂之四種——。行住坐謂之三種——。行住謂之二種——。○肅宗遇南陽國師。師起迎。帝曰、何必起也。師曰、檀越何明

向——内見貧道邪」（四威儀、華嚴經三十二に云ふ、一切の諸佛行——、普く衆生に与して佛事を作す。威有りて畏るべき、之を威と謂ひ、儀有りて象るべき、之を儀と謂ふ、と。○菩薩戒經に八種苦を説く。其の三は——苦なり。行住坐臥之を四種——と謂ふ。行住坐之を三種——と謂ふ。行住之を二種——と謂ふ。○肅宗南陽國師に遇ふ。師起ちて迎ふ。帝曰はく、何ぞ必しも起たんや。師曰はく、檀越何ぞ——の内に向かひて貧道を見ることを明らかにせんや、と）と、四威儀に関する文献を列挙して抄する。まず『華嚴經』に、全ての佛行が四威儀であり、あまねく衆生と与し佛事を行う、とあることを引用し、さらに「威儀」の解釈として、『春秋左氏伝』襄公三二年の記事を引いて説明する。威儀があつて畏敬の念を感じさせることを「威」とし、形が整つていて人々の模範になることを「儀」とするという。そして、『菩薩善戒經』に、八種苦の三番目に威儀苦があるとし、行住坐臥が四威儀を意味するとする。さらに、肅宗が南陽慧忠國師に会い、國師が四威儀の大切さについて述べたこと（『祖庭事苑』「四威儀」）を引用している。

【白璧】白色の宝玉。黄庭堅は「憶邢惇夫」（『山谷内集詩注』卷十）詩に「眼看白璧埋黄壤、何況人間父子情」（眼に白璧の黄壤に埋めらるるを見る、何ぞ況んや人間父子の情をや）と詠み、邢惇夫の父である邢恕がその死を悲しんでいるのを慮っている。一韓智翹の抄に「眼一、マノアタリ見夕璧ノ如クナ人ヲ死ナセテ、土ニ埋タカ、我サヘ哀ニ、イカニ父ノカナシカルラウソ」とある。ここでは「白璧」を壁山太和侍者に比している。

【願力】「大願力」とも。甚深広大な慈悲により、仏が過去世から積み重ねた衆生済度の請願力。雪峰慧空「観音」（『雪峰空和尚外集』）に、「此大開士願力弘深。初無自相、隨衆生心」（此大開士の願力弘深なり。初めより自相無く、衆生の心に随ふ）とある。

【如山】山のように大きいことのとえ。

【寸不移】わずかばかりも変わらないこと。「寸」は、すこし、わずか。

余瀆 追悼偈頌（詩）である。本来は住持の行為に用いられる「出隊」語を、侍者位である壁山太和のために用いるのは、宗旨の活動に殉じた当事者への敬意の表れか。

前半部において、「紙衣侍者」と称された香林澄遠を詠出することにより、これまで受け継がれた教えを堅守する壁山太和の生き方を称する。後半部では、壁山を「白璧」に比して、死後も不変の願力を詠じ、その死を悼んでいる。

仏教用語（禪語）や禪林の故事が多く用いられるのは、死者を追悼するための偈頌であるためである。

4 和建長實翁送岳侍者奔本師喪其一

建長の実翁 岳侍者が本師の喪に奔るを送るに和す其の一

侍者參得禪了也 侍者 禪に參得し了れり

洪波溺殺白頭師 洪波 溺殺す 白頭の師

荷鋏今日向何處 鋏を荷ひ 今日 何処にか向かふ

烟際暮山青上眉 烟際の暮山 青くして眉に上らん

*韻字は、上平声四支「師・眉」

題意 受業師の喪に赴く雲心希岳を送る實翁聰秀の詩に対して、義堂が唱和した詩。

「實翁」は實翁聰秀（蘭溪道隆—葦航道然—實翁）。入元して古林清茂に参じた経歴を持ち、帰朝後、貞治二年（一三三三）頃には、下野小山の長福寺に住しており、義堂もそこを訪れて賀軸に跋をもらっている（『日工集』貞治二

年三月一日の条)。のち鎌倉東勝寺、淨妙寺、建長寺に昇住した。実翁は門弟に対して、その字説を義堂に求めさせたりするなど、義堂との交流を積極的に行っているほかに、中巖圓月や此山妙在とも詩文を応酬している。幅広い交遊関係と活発な文筆活動が窺える。応安四年(一三七二)三月二十七日(一に二十六日)示寂。「岳侍者」は雲心希岳か。玉山徳璇―月山希一―雲心。『日工集』応安三年正月十三日の条では、義堂に大覚派と仏光派の両門徒の状況を報告している。「本師」は、最初に得度を受けた師で、受業師・受経師ともいう。ここでは月山希一を指すかは不明。

古劍妙快も「次韻建長實翁和尚送侍者赴本師訃」(『了幻集』)詩を詠んでおり、義堂と同様に実翁の詩に和している。その詩題の注記に「師住廉溪」(師は廉溪に住す)とあることから、本師の所居が廉溪であったことが知られる。

『日工集』応安四年三月二十日の条に、「初更禪より起つ。建長の秀岳(希岳)力。その場合雲心希岳)蔵主来談す。談之を久しくして更に深ければ、留めて宿せしむ。余の旧実翁に和して烟際の暮山青眉に到る等教篇を挙げて云ふ、人咸之を絶唱と謂ふ、と」とあり、本詩の末句が人口に膾炙して賞賛されていたことが分かる。

現代語訳

岳侍者は本師に参じて坐禅につとめ、悟りを得ることができた。しかし、予期せぬ大波が押し寄せ、白髪頭の本師を溺死させてしまった。今日は師の墓を掘るために、鍬を担いでどこへ向かったのであるのか。もやが立ちこめた辺りの夕暮れの山が青いを見ると、眉をしかめてしまう。

語釈

【侍者】住持の給仕・補佐をする役位。

【参得禪了也】「参得」は、参ずること、また師家に参じ坐禅をして悟りを得ること。得は体得の意で、悟りを己の身に体得すること。「了也」は、おわれり。終了したことを意味する。『五家正宗贊』の「五祖演禪師」(臨濟宗)に、

「師握手巡察云、我侍者参得禪了也。拳瓦鼓歌接無為泰、至輪玄武處、泰有省」(師手を握り巡察して云ふ、我が侍者禪に参得して了れり。瓦鼓の歌を挙げて無為の泰に接す、玄武に輪す処に至れば、泰にして省有り、と)とある。また了菴清欲の「析天童平石二偈送言侍者再参」(『貞和類聚祖苑聯芳集』送行部)に、「侍者参得禪了也、倒拈苕箒畫蛾眉」(侍者禪に参得して了れり、倒に苕箒を拈して蛾眉を画く)とある。「侍者参得禪了也」句について、竺仙梵僊は「送裔楚侍者」(『天柱集』)詩に、「侍者参得禪了也、此語相傳遍天下」(侍者禪に参得して了れり、此の語相伝して天下に遍し)と言ひ、禪林に流布していたことが知られる。

【洪波】大波。『碧巖録』第十八則の本則において、雪竇の著語に「海晏河清(洪波浩渺、白浪滔天、猶較些子)」(海は晏やかにして河は清し(洪波浩渺、白浪滔天なるも、猶ほ較ふること些子がごとし)とある。「洪波浩渺、白浪滔天」は、大海の波浪が天に達するほど雄大なさまを表す禅語としてよく使われる。

【溺殺】水に溺れて殺すこと。『論衡』卷四に「呉王夫差殺伍子胥、煮之於鑊、乃以鴟夷菹、投之於江。子胥恚恨、驅水為溝、以溺殺人」(呉王夫差は伍子胥を殺し、之を鑊に煮、乃ち鴟夷の菹を以て、之を江に投ず。子胥恚恨し、水を驅りて溝を為し、以て人を溺殺す)とあり、夫差に殺された伍子胥の怒りが水を驅って大波を立て人を溺死させたという。ちなみに典拠の『論衡』であるが、永和四年(一三七八)四月二十三日に、絶海中津より義堂に贈られている(『日工集』)。

【白頭師】白髪頭の本師。ここでは雲心の本師を指す。雲外雲岫「退岩講主兼呈英宗師」(『貞和類聚祖苑聯芳集』哀悼部)に、「見説即除天竺寺、訃聞腸斷白頭師」(見るならく即ちに天竺寺も除せられ、訃聞きて腸断す白頭師)とある。

【荷鋏】くわを担ぐ。ここでは希岳が本師の墓を掘るためか。愚極智慧「榮上人聞本師玉溪訃音」(『貞和類聚祖苑聯芳集』哀悼部)に、「荷鋏歸去玉溪頭、風落梅花片々愁。一滴渾無乾徹底、洪波白浪拍天浮」(鋏を荷ぎて帰り去る玉溪頭、風は梅花を落とし片々愁ふ。一滴渾べて無く乾きて底に徹し、洪波白浪 天を拍ちて浮かぶ)とある。

【向何處】どこへ向かうのか。李白「東魯見狄博通」詩に、「去年別我向何處、有人傳道游江東」(去年 我に別れて何処にか向かふ、人有りて伝へ道ふ 江東に遊ぶと)とあり、前の句の問いに答える形で次句が詠まれている。

【烟際】もやの立ちこめた辺り。

【暮山】夕暮れの山。

【青】山の色が青々としていること。ここでは暗に墳墓の地を意味する「青山」を意識していると言えよう。蘇軾の「予以事繫御史臺獄。獄吏稍見侵。自度不能堪。死獄中、不得一別子由。故作二詩、授獄卒梁成、以遺子由」詩に「是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神」(是の処 青山 骨を埋むべし、他年夜雨 独り傷神)とあり、その一韓智翹抄に「是—、坡言ハ、我ハ今死スヘキ程ニ、是処ノ青山ニ骨ヲ可埋ソ」とある。

【上眉】眉をしかめる。蘇軾「道者院池上作」詩に「井好能氷齒、茶甘不上眉」(井好しく能く齒を氷しくし、茶は甘く眉に上らず)とあり、『四河入海』の『脞説』には「茶苦則人飲之顰眉也」(茶苦ければ則ち人之を飲みて眉を顰むなり)とあり、一韓の抄には「悪キ茶ヲ飲メハ必ス攢眉ソ」とある。黄庭堅「四休居士詩三首其三」(内集注卷十九)には「借問四休何所好、不令一点上眉頭」(借問す 四休 何の好しとする所ぞ、一点をして眉頭に上らしめず)とあり、その一韓智翹抄に「借—、サテ此人ノ四休ノ好イ謂ハト問ヘハ、四ノ事ヲ皆休シタホトニ、一点モ眉ニ上ルヘキ事力無。若一病ニモ拘テハ、眉ヲシハムベキ事力無ホトニ活計ソ。愁カアレハ眉ニ其色カ見ユル者ソ」とある。

る。

【余瀆】前半部で岳侍者とその本師某の現状を詠出し、後半部で郷寺に還帰した岳侍者が本師のために、没後の埋葬・供養に奔走しているであろう様子を思いやっている。

偈頌としての性格が濃い一首である。起句に禅林の常套句を用い、下句にも禅籍に見られる語句の引用が目立つ。特に『貞和類聚祖苑聯芳集』は偈頌詩の総集であり、その編者が義堂その人であることに留意すべきである。

5 和建長實翁送岳侍者奔本師喪其二

建長の実翁 岳侍者が本師の喪に奔るを送るに和す其の二

報恩只在負吾時 報恩 只だ吾に負く時に在り

何必重尋落髮師 何ぞ必ずしも重ねて落髮の師を尋ねん

火後莖茆收拾了 火後の莖茆 收拾し了れば

歸來一展巨峯眉 歸り来りて一たび巨峰に眉を展べしめよ

*韻字は、上平声四支「時・師・眉」

【現代語訳】 恩に感じて仏事を行うのも、今となつては自分の意に反するときではない。もう再び落髮受業の師を尋ねる必要がなくなつてしまったのだ。火葬後に生じた一本のかやを拾い集めた後は、いったん建長寺に帰つてきて、みなを眉を伸ばして安堵させてあげてほしい。

【語釈】

【報恩】仏・祖師などの恩に感じて仏事・布施などを行うこと。『碧巖録』第十三則「本則評唱」に、「雲門云、他日老僧忌辰、只举此三轉語、報恩足矣」(雲門云ふ、他日老僧が忌辰に、只だ此の三轉語を挙げば、恩を報ずること

足りなん、と)とあり、雲門文偃は、自分の命日に真理を悟らせる三つの語を提示してくれたら、自分の恩に報いたことになるという。

【負吾時】自分の意に反する時。『無門関』第十七則「國師三喚」に、「國師三喚侍者。侍者三應。國師云、將謂吾辜負汝。元來却是汝辜負吾」(國師三たび侍者を喚ぶ。侍者三たび応ず。國師云ふ、將謂らく吾汝に辜負すと。元來却是汝吾に辜負す、と)とあり、南陽慧忠が侍者を三度呼ぶと、侍者が三度返事をしたことに對し、慧忠は侍者が悟れないのは自分の教化が悪いからと思っていたが、実は侍者が自分に背いているがために悟れないのだという。「辜」も、そむく、の意。笑隱大訥の「贈天童言侍者」(『貞和類聚祖苑聯芳集』送行部)にも、「汝吾に負き吾汝に負く、曲ること鈎の如くなる処直にして絃の如し」とある。ここでは生前の本師に会うことが出来なかつたことが、意に反するのであろう。

【落髮師】髪をそり落とし、得度して僧となるとき師僧。出家得度の師。受業師。ここでは本師のこと。『枯崖和尚漫録』下に、「蒙庵既得法於其落髮師光晦庵、以大父事雪堂、復謁木庵於乾元」(蒙庵既に法を其の落髮の師たる光晦庵に得、大父を以て雪堂に事へ、復た木庵に乾元に謁す)とある。また石門慧徹の「白雲」(『貞和類聚祖苑聯芳集』讚部)に「揚岐笑裏喪全機、玷辱茶陵落髮師」(揚岐笑裏に全機を喪ひ、茶陵落髮の師を玷辱す)とある。

【火後莖茹】「火後一莖茹」は、火葬した後生じた一本の茹(かや)。法身が消滅去來に隨しない妙用をいう。『筠州洞山悟本禪師語録』に、「僧問師云、亡僧遷化。向甚麼處去。師曰、火後一莖茹」(僧師に問ひて云はく、亡僧遷化す。甚麼の處に向かひて去る、と。師曰はく、火後の一莖茹、と)とあり、死んでしまったらどこへ行くのか尋ねられたところ、一本の茹(かや)となることを答えている。ここでは本師某を指す。

【收拾】拾い収める。

【巨峯】建長寺を指す。「巨福山建長興國禪寺」の略称で、山号「巨福山」に拠る。鐵庵道生「賀湯藥侍者序」(『純鐵集』)に、「逮于東明老師、再鎮巨峯」(東明老師に逮びては、再び巨峯を鎮す)とあり、東明慧日が建長寺に再び住したことを述べている。義堂自身も、五言律詩部の詩題に伯英德備を指して「余獨閉戸横眠、忽見巨峯第一座伯英」(余獨り戸を閉めて横眠するに、忽ち巨峯第一座の伯英に見ゆ)と言ひ、「送曇書記歸京頌軸序」にも雪山口曇を指して「巨峯雪山記室曇公」と述べている。

【展眉】眉をのばす。顔の様子が伸びやかになること。愁いの消滅すること。『碧巖録』第六十一則の頌に「野老從教不展眉、且圖家國立雄基」(野老 從教 眉を展べざることを、且く図る 家國 雄基を立することを)とある。北磻居簡「布袋」(『貞和類聚祖苑聯芳集』讚部)に、「開裏逢人笑展眉、布囊結口自相隨」(開裏人に逢へば笑ひて眉を展べ、布囊口を結びて自ら相隨ふ)とある。

余瀛 前半部では岳侍者の本師を亡くした愁いを慮り、後半部では実翁を含む建長寺僧の愁いのことを慮っている。第二首目も偈頌としての性格が濃い。依頼主の実翁の心情を付度して詠出するのは、義堂の実翁に対する親密の情の表れであろう。

